



連載小説

〈2〉

硝子管の中で

福元早夫

え／山本文彦

異人館へ久美子を誘ったのは、単なる思いつきからではなかった。小学校の五年生までを、長崎ですごしたという彼女を、異人館へ連れて行けば、彼女が、故郷を思い出してくれるかもしれない、と考えたからだ。神戸は、どこか長崎に似ている、と久美子はいったことがあった。

ぼくたちは異人館の二階のテラスから、神戸の街を眺めていた。こころよい海風がそよでくる。街は太陽にかがやいて銀色に光っている。港には大小さまざまな船がつかねがれている。つなぎきれない船は海面に浮遊している。造船所のあたりは、巨大なクレーンの、鉄の林だ。

ここからの眺めは、絵のようである。動いている人々の姿が、直接見えないせいかもしれない。海も、街も、工場も、すべて静止して見える。ここに立っていると、風景画、「神戸」を眺めているような気分である。

思いがけない、強い風が吹いてきた。久美子の長い髪がおどった。彼女はあわてておさえつけ、額に乱れた髪をかきわけた。

久美子のおでこは美しい、と思う。すじのとおった鼻に、気品が光っている。彼女がほほえむと、頬で、えくぼが、はにかんだようにちいさく笑う。とても可愛い、

とぼくは思う。久美子をはじめて見たとき、彼女は、きつと、どこかいいところのお嬢さんなのだ、とぼくは思っていた。どことなく品位があり、もの静かだった。ものを言う態度、しぐさのひとつひとつに、洗練された育ちのよさ、といえるようなものがただよっているのだった。だからといって、決して彼女は、お高くとまっているわけではなかった。むしろ、その逆だった。頭がとてもひくかったのである。

久美子と文通をはじめてしばらくして、彼女はいいところのお嬢さんではなく、ごく普通の、ぼくとあまりかわらない、勤め人の家庭の女の子であることを知った。それに、彼女は、長崎の出身だった。ぼくと同じ、九州の人間だったのである。ぼくはとびあがったのをおぼえている。

彼女は、ぼくと共通したものを、背後にもっている、そうぼくは感じた。とりわけ、九州という、精神的な風土が、ぼくたち二人には根深くすみついていて。

そう考えていくと、ぼくの彼女を思う気持は、急激に接近していきはじめた。はじめのうちは美しい彼女への、淡い憧れだった。それがいつしか色づきはじめ、文通によって彼女をいままで以上に知りはじめると、色づいたぼくの心に火がついた。

ぼくは確信した。あの美しい久美子が、この中
思い抱く異性とは、このぼくである。いや、ぜったいに、
この、ぼくでなくてはならないのだ。

また、強い風が吹いてきた。久美子はさきほどのしぐ
さをくりかえしながら、こちらをのぞきこむようにして
いつてきた。

「仕事、そんなにもしろくないの……」

ぼくは黙った。久美子を相手に、仕事の話
などしたくなかった。楽しくて、やりがいのある、
ましてはそれが、生きがいにつながっていきそう
な仕事ならいざしらず、あんな、試験管工場の
灰色の生活など、考えたくもなかった。

「……元気がないのね。田村君らしくないわ
よ。どうしたの」

久美子には確か弟がいたはずである。わけ
もいわず、かたくなになっちゃった弟をな
だめすかすようないいかたで彼女はいった。

「こないだね」

思いきってぼくはいった。べつに彼女の弟
のような気分にさせられてしまったわけでは
ないけれど、なんだか急に、自分の態度が、
男らしくない、と思えてきたからだだった。

「こないだ、つても、つい最近のことなんだ
けど、パートタイムで働いているおばちゃん
に、わざわざ高等学校まで卒業して、な
んでまた、こんな工場に勤める気になったの、
って言われたんだ。ショックだったなあ」

「それで……」

「それで、つて……」

「何とこたえたの」

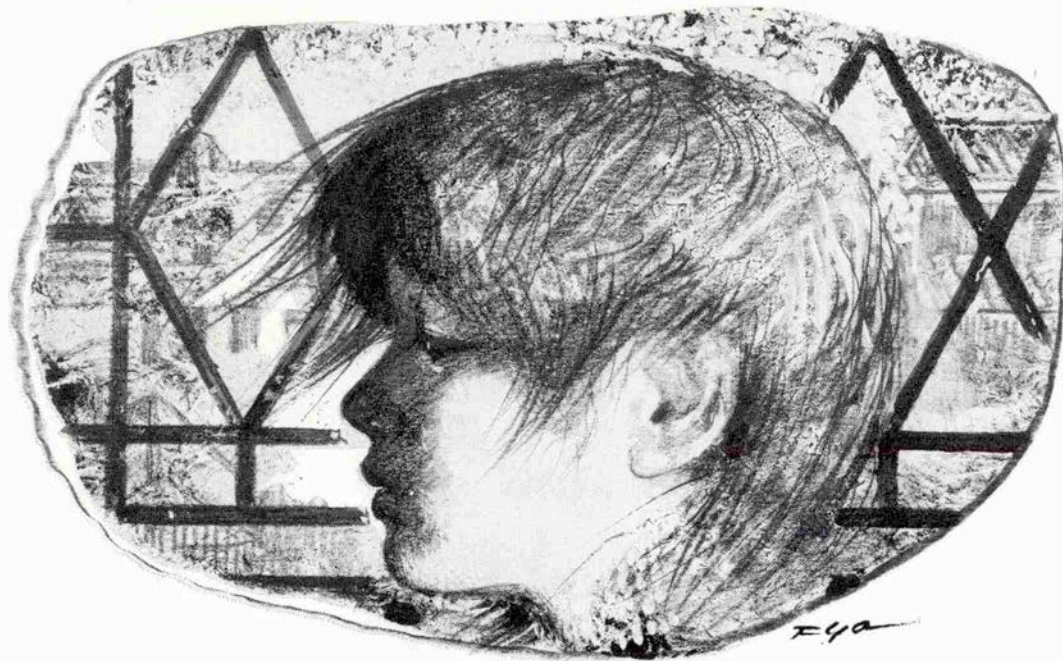
「何ともこたえることができなかった。シ
ョックで、心臓がねじれそうだった」

「オーバーね、田村君って」

「ほんとなんだ」

「どうして……」

「そのおばちゃんに問われたことは、ぼく



が、仕事をしながら、毎日毎日、自分自身に問いかけてきたことばだったから……」

久美子は黙った。神戸の街を眺めながら、口をすこしとがらせ、何か考えこんでいるふうだった。ぼくはいつと。

「たった三秒の間に、試験管の半製品が目の前で出来あがっていくんだ。そいつをぼくは、黙って見つめている。たぶん、にがむしを噛みつぶしたような顔をしていると思う。朝から晩まで、ずうーっと」

「……しごと、そんなにしんどいの」

「しんどいことはないんだ。単純なんだ。試験管の半製品が、大きな容器に、いっぱいたまったら、こんどはそいつを、次の作業場へはこんでいくだけなんだ。単調で、単純で、誰にでもできる仕事なんだよ」

「仕事って、そんなもんじゃない。あたしだって事務のしごとだけど、毎日同じことのくりかえしよ。つまらない、と思えばこんなつまらないしごとはない、と思えるし、ようするに心の持ちようよ」

「中島君の場合、事務のしごとだからいいよ。自分のペースでできるから。ぼくの場合、そうじゃないんだ。機械にしばられ、機械にこき使われているんだよ」

「さっきもいったけど、あたしたち、やっと社会人一年生になったところよ。まだわからないのよ。仕事のおもしろさが……」

「そうかなあ……」

「そうよ」

「ぼくね、仕上っていく試験管の半製品を、日がないうちにちじいーっと見つめつづけるが、これが、工業高校の機械科を卒業したばかりの、若者のする仕事なのか、と自分で自分に腹がたってくるんだ。チャップリンじゃないけど、モダン・タイムスもいところだよ。ぼくは機械の部分品、機械のドレイなんだよ。悲しくなるよ」

「……もう、やめよう。またはじまった、っていう感じよ、田村君の悪いくせが。すぐに自分を悲劇の主人公に

するんだから」

久美子がいった。いくぶんひやかすように彼女はそういうと

「旅行はしないの、ちかごろ……」

と、きゆうに話題をかえてきた。

するとぼくは、すぐにそのほうにのせられてしまった。ぼくの、何よりの趣味が、旅行だったからである。久美子も、そのことを知っているのだ。

「この夏、また長崎へ行ってきた」

得意満面の笑みをつくってぼくはいった。

「また行ったの、よくいくわね」

いかにもおどろいた、といったふうないかたで久美子がいつてきた。

「ああ、こんどで、四回目かな」

さらに得意になってぼくはいった。

「そんなにいい、長崎って……」

のぞきこむようにして久美子が訊いてきた。ぼくは右手の親指と人差し指をまるめて、グーのポーズをとりながらいった。

「そりゃあ、いいよ。最高にいいよ」

長崎は君の故郷じゃないか、いいにきまっているよ、といたいところだったけれど、いえなかった。そこまですていまして、あまりにもきざすぎ、へたな口説きの文句、おべんちゃらにきこえそうだったからだ。

高校時代、アルバイトで得た金をためて、ぼくは毎年、夏の終りに、長崎へいった。

なぜ長崎へ行きたい、という気持がはたらいたのか。

それは、久美子と出会ったことと深くかわわっている。

彼女から、写真入りの手紙をはじめもらったとき、

ぼくは、胸に、激しい衝撃をうけた。夏休みを、故郷の

長崎ですこしてきたという久美子の、故郷を語る手紙と

写真である。彼女は長崎の街を背景に、微笑んでいた。

ぼくはとてもショックだったのをおぼえている。胸を、

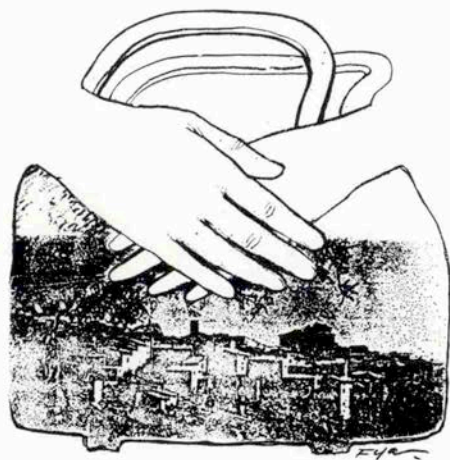
何かに、強くしめつけられている思いだった。

五歳のとき、両親につれられて故郷の鹿児島を去って
から、十年ちかくがたつというのに、ぼくはいちども、
故郷へ帰ったことがない、まずそう考えてショックだっ
たのだ。

羨しい、と強く感じた。久美子は帰っていきける故郷を
もっている。ぼくにはそれが無い。ぼくたちの家族は、
故郷を去ってしまったのだ。帰っていきける土地がない。
恋をするころのどこかには、コンプレックスがひそ
んでいるのであろうか。とりわけ、初恋の場合、とくに
それが強いのだろうか、とぼくは考える。

はじめのうち、久美子を思うぼくの気持は、淡いあこ
がれのようなものだった。いや、正直にいつてしまえば、
それとて、根源にコンプレックスがあったのかもしれない。
い。

久美子は勉強がよくでき、絵を上手に描くことのでき
る、温和な女学生だった。そんな彼女にぼくはあこがれ、
異性として意識しはじめたのだった。もの静かで、美し
い彼女は、ぼくにとって理想の女性だったのである。久
美子は、ぼくがもっていないものを、いくつかそなえて
っていた。



さらに久美子は、故郷をもっていた。故郷をもってい
ないぼくにとって、それは、生まれてはじめて経験する
激しい衝撃だった。いっそのこと、故郷の記憶など、ま
ったくなければいいのに、とぼくは考えたものだ。

だけど、五歳までぼくをつつみこんでくれていたあの
深い山々、住んでいた家のすぐ下を流れる川のせせらぎ、
強烈な南国の太陽、高台にのぼると、はるかにのぞむ火
を吐く桜島山、それらのひとつひとつは、ぼくが忘れ去
ってしまおうとすればするほどに、より鮮明にうかびあ
がってきて、少年のぼくの胸をしめつけてくるのだった。

故郷へ帰りたい、いや、帰って行ける故郷がほしい、
とぼくは考えた。そうすれば、久美子とぼくは、故郷を
持っている、という共通の立場にたつことができるので
ある。たとえ、長崎と鹿児島のがいはあっても、同じ
九州の故郷である。

だがそれは、むなししい願いだった。ぼくが故郷を思う
と、なぜか、家族そろって故郷を去って来た日のことが、
きのうのことのように、目の前にせまってくるのだった。

「……さあ、ここが、おいどんたちの、第二の故郷じゃ」
父はいったものだ。急行列車が闇の中を二〇時間ばか
り走りつづけ、神戸の駅へついたときだ
った。寒さにふるえ、兄も姉もぼくも、
子供たちは歯をがちが鳴らしていたと
思う。

神戸の街は夜明け前だった。父も母も
肩をすぼめ、頼りなさそうな顔をしてい
た。目がすこしも光っていないかったので
ある。

「さあ、家族みんながひとつになって、
がんばるぞ」

父がいった。頭固になったときの父の
いいかただった。母は白い息を吐きなが
らいていねいに襟を合わせた。

「この神戸が、みんなの新しい故郷じゃ」

むりに笑顔をつくって父がいった。母は黙ってうなづき、ぼくたち三人の子供をひきよせ、一人一人、得心させるように頭をなでまわした。

「さあ、行くぞ」

父はかけ声をかけるようにいった。ぼくたちはすがりつくようにして母をとりまき、トランクをかついだ父のあとをついていった。

父は何度もぼくたちを振りかえった。振りかえりながら父は、何度も同じ笑いをくり返した。母をふくめて、ぼくたちを安心させるような、前途に希望をもたせるような、そんな笑いだった。母だけがそんな父に笑い返していた。ぼくたちは初めて足を踏み入れた見知らぬ土地に、笑うゆとりなどなかった。

久美子への恋心、というよりも、理想的な異性としての久美子へのあこがれ、それは同時に、写真で、久美子の背景をつくっていた長崎の街への憧れとかさなった。不思議だった。長崎が久美子の故郷である、ということを知ってしまうと、故郷をもっていないぼくは、久美子の故郷、長崎に強くあこがれはじめ、久美子のことと同じくらい、長崎のことを知りたい、と思いはじめたのである。だからぼくは、アルバイトで得た金を貯め、長崎へ足をはこんだのだった。

恋をさらに発展させるためには、何か共有できるものがなくてはならない、とぼくは無意識のうちに考えたのちにちがいない。だからぼくは、年ごとに長崎へ行った。ぼくのこころの中で、長崎は、久美子そのものだったのだ。久美子を占有したい、そのためには、彼女と、長崎を共有しなければならぬ。

「……長崎って、そんなにいいのかなあ」

造船所のあたりを眺めながら、久美子は一人ことのようについていた。

「いいよ。何回行ったって新鮮だよ」

「そう……」

「そうだよ。ぼく、また行くよ」

「あなたの故郷は鹿児島だったわね」

ふいに彼女が訊いてきた。

「いいところでしょね、きつと」

一瞬、ぼくは喉に息がつまった。

高校三年生のときだった。長崎へ行ったついでに、ぼくは鹿児島まで足をのばしたことがある。父や母にも、兄や姉たちにも内緒だった。我が家では「故郷」にふれたがらなかったからだ。

鹿児島本線に乗って西鹿児島駅へ行き、そこで、日豊本線にのりかえるのだった。汽車は桜島を遠まくようなかたちで錦江湾沿いを走りつづけた。ぼくは父や母と同じ言葉のアクセントをもつ故郷の人々を親しみをこめて眺めつづけた。故郷の風景にしがみついた。

西鹿児島から五番目の駅で汽車を降り、そこから国鉄バスにのると、終点がぼくの生家だった。バスは深い山の中を曲りくねって走りつづけた。ぼくは揺れた。生家が近づくにつれ、ぼくの心は激しく揺れ、目をあけていられなかった。

故郷を、ぼくはあまりにも美化しすぎていたのちにちがない。故郷に恋をしていたのかもしれない。それも、片恋いを……。

ぼくの生家は跡形もなく取り壊わされており、雑草がおしげつて、背を高くのぼしていた。その前でぼくは涙ぐみ、うなだれた。故郷へなど、やって来るのではなかった……。

「……あたしね、ちかちか、故郷へ帰って行ってしまうかもしれないの」

久美子がいった。突然だった。

「えっ……」

ぼくはまた、喉に息をつめた。

(つづく)



陶 芸
古川 軒

三宮センター街1丁目浜側
(ニューセンタービル)

電話 (078) 331-2813



リーヌパイ焼上る 落葉重なる朝

芦屋神社で 写真 / 米田定蔵



洋菓子と喫茶

モントルー

芦屋本店 / 芦屋市光公町 9-7 (阪神芦屋駅前)

TEL (0797) 31-1781

岡本店 / 神戸市東灘区岡本 1-10-16 (阪急岡本
駅西100米 第2アカギビル) TEL (078) 451-8891

□第2回神戸文学賞受賞作品

生活

△第十一回▽

吉峰 正人
絵・榎 忠



部屋……家の中で人が住むように区切ったところ、仕切られた空間。ぼくのいるここはまさしくそのものである。柱によって区切られ、ロープによって仕切られ。これ以上の確かな部屋が他にあるだろうか。どれが自分の家だったのかと探し迷うこともない。帰る道を気にしながらわざわざ出かけて行くこともない。用があれば相手からやってくる。食事を運び、小便までさせてくれる。

今に特別仕立てのワギナを持ってきてくれるだろう。それにペニスをくっつけただけで、ぼくはたちまちオルガズムを感じるようになるのかもしれない。
もしかしたら、ここは今までになく最高に居心地のいい部屋ではないのか。それが証拠に、どこに何があるのか、ぼくはすっかり覚えてしまったではないか。ダンスにはぼくの体にピッタリのパンツやパジャマが整理され

78 Chu Enoki

ているし、それをつけたぼくの姿が鏡にはっきりと映しだされている。

バサバサだった髪がきれいに頭のてっぺんで丸められ、唇を這っていた無数の小さな虫が紅に隠されている。色とりどりになった顔を近づけながら、

「こんな髪型が好きだったわ、あなたは」と女は話しかけてくる。できるだけ女や子供を見ないでいようと思うが、どういうわけか、この部屋にあってはどこを向いても子供がいて女がいる。

「私はこういう髪型はあまり好きではなかった。でもこうしていないと、おれの嫁さんみたいじゃないと怒ってもきいてくれないんだもの。どう、似合うでしょう。最近では私自身気に入っているのよ。あなたに言われるまで気がつかなかったけど、こんな髪が私にはピッタリね。自分のことなんてなかなかわからないものね」女はしきりと髪を撫であげる。鏡はぼくと一緒に、そんな女の姿も明確に映している。

髪の間ね方、その結び具合、なかなか似合っている。そして女が言うように、確かにぼくはそんな髪型が好きである。何故彼女がぼくの好みを知っているのか。たいていの男は長い髪を造作なくアップにした女性を好むと思うものであると、そんな男性の心理を読んだまでのことか。偶然か。それにしてもできすぎている。ぼくにとって、それを妻だと思ふ一つの要因に、髪型は確かに含まれているのである。

いつだったか、妻が髪を短く切ったことがある。その時、ぼくは無性に腹がたち、顔を見るのもいやだった。口もきかなかった。なんだか違う人というようで喋れなかったのである。一緒にいてもなんとなく落ちつかない。ぼくの知っているあいつはずっと長髪であった。その長さに安心してた。その方が妻だと感じやすいのである。今までショートカットでボーイッシュな感じだったものが、ある日突然、腰まで髪が伸び、それを振り乱して出迎えにきたら、おそらく誰だって、部屋をまちが

えたのかと驚くにちがいない。きつと。

女の視線を避け、ふと見つけたところに彼女の膝がある。やや短めのスカートからはみ出た部分。そこから足の先まで、何かの粉をまぶしたように白い。つるつるとした肌。指をもっていくだけで、その表皮がペロリとめくれてきそうである。蒼い糸状の血管がそのところどころに見える。血は徐々に浮きあがってくるようだ。

案の定、蒼い糸は肌の上に這いあがってきて、ゆるやかに流れはじめ。わずかつつ色を濃くし、位置を変え。それは女のものでなく、脚に住みついた別の生き物のように見える。

ぼくは寢床の中から、朝の用意をはじめた妻の、脚の裏側にへばりついているその蒼い生き物を見るのが好きだった。カーテンを越して射し込んでくる光の加減や、妻のちよつとした体の動かし方によって、その色や位置や流れ具合が微妙に変化する。愛しあつたあくる朝などはそれがことさら美しく見えてくる。もうそのままとそこら動かさず、誰にも触れさせず、「流れ」と表題をつけて、ガラス細工の中に模様としてそれをほめ込んでおきたいほどである。

妻を抱く時、ぼくは好んで膝のまわりのその蒼い生き物をいじり、愛したものである。それに触れると、ひやあと嬌声をあげて体をよじる妻を可愛いと思つたものだ。あいつの体のどこにホクロや傷があり、ヘソや尻の形がどうだったのか、知らない。どのあたりに愛の城があり、そこへどのようにしてぼくを迎え入れるのか、よく覚えていない。しかし、膝のまわりのその生き物だけは、ぼくの記憶の回路にきつちりと収まっている。

女の膝に唇をあて、吸うと、ひやあとと言って体をのけぞらせるだろうか。ひき締まった肉の中から、一本、また一本、浮きあがってくる蒼い流れの筋。昨夜愛しあつたわけではないのに、それは美しく、ぼくを魅了する。三歳の女の子を犯す少年のように慥え、それは強く流れることをやめない。その流れを誇り、見せつけるかのよ

うに、女は素足である。蒼く透き通った女のそれを、ぼくは思いきり吸いあげてみたいと思った。

今日で何日目だろう？ここにこうしているのは。

誰かが戸を叩いている。うなだれていた顔をあげ、ふと、ぼくは息づく。あきらめるのはまだ早い。一人暮らしの老人の死だって、いつかは発見されているではないか。ぼくはまだ死んではない。吐く息も白ければ、出る小便だって臭いつきである。隠し通せるものではない。戸の向こうには何億の人がいる。その人たちの誰とも関わらずにいることは不可能である。何故そんなことに気がつかなかったのか。生活とは、この世の中で生きつづけて活動することではないか。ぼくは体を乗りだす。まさか応待に出ないつもりではないだろう。誰だって、ぼくのこの姿を見れば異常を感じるにちがいない。ぼくはたちまち近所の人に発見されるだろう。盛んに戸を叩く音。

「ちづるちゃん！出てちょうだい」女は奥の炊事場から声をかける。ちづるちゃんか？それにしても聞ききれない名前である。どこかの飲み屋の看板にそんな名を見たような気がするが、よく思いだせない。

戸を少し開く。白い光の筋が揺れながらぼくの足元まで射し込んでくる。外はよく晴れているようだ。首を傾け、戸の隙間から、ちらつと外をのぞいたちづるちゃんは、走って母親のところまで行き、腰にしがみついた。背中を丸めて小さくなった女の耳元で何かをささやいている。

妻かもしれないとぼくは思う。いや、彼女でなくてもいいと考える。この際、誰でもいい。この部屋に入ってきて、ぼくを見つけてくれさえすればそれでいい。「まあ、奥さん、なんてことをするんです」言いながらその人はロープを解くだろう。「あら、大変、どうしまししょう」警察に駆け込むかもしれない。どちらでもいい。さあ、入ってこい。早く助けにこい。

「いいわよ」女が言う。何がいいのか？妻と争って、ぼくをとりあおうというのか。ちづるちゃんはふたたび走って戸のところに行き、今度は勢いよく開ける。光が束になって眼に突き刺さってくる。その眩しさを上瞼で避ける。

「その代わり、あまり騒いではだめよ。静かに遊ぶのよ」ちづるちゃんを入れて女三人男二人。五人の子供はしばらく戸口に立ったままぼくを見つめている。髪をリボンで結んだ子がちづるちゃんに耳うちする。しながらぼくを横眼で見る。ちづるちゃんはいうなずく。リボンの子は肩をすくめ、口に小さな手をあててケツと笑う。

「さあ、入りましょう」とませた口調で一番背の高い女の子が言う。戸が閉められる。入口のところに五人は車座になって坐る。もうぼくを見ようとしめない。

近所の子供らしい。遊びにきたようだ。それにしても女は大した度胸をしている。相手は子供だとしても、それをこの部屋に入れたらどういうことになるか、わからないことはないだろう。いつまでも隠しておくことはできないと悟り、徐々に外の者に馴れさせようという作戦か。しかし、どこまでいっても真実は一つ、その人間は一人なのである。犬や猫のように、そんなに簡単に育て飼うことはできない。

五人はそれぞれ持ってきたおもちゃや本を真中にして、遊びはじめる。しばらく耳を傾けていると、どうやら五人は一つの家族であり、誰がお父さん役をやるか、誰が子供になるかでもめている。結局、男では強そうな方が父親の役をとり、母親は背の高い女の子に決まった。

「ちよっと聞いたら変わってね」とリボンの子が言った。「ああ、こんなものは順番ですんだ。誰がなってもいいんだ。お父さんが終わったら、今度はおまえの子供になつてやるよ」と父親役の子が言う。

ぼくも順番でこうなったのだろうか。誰がどの役をやっても、それなりに暮らしていけるのか。いや、これは

子供の遊びではない。ぼくはそれ以上黙っていられなくなり、

「ねえ、君たちノ」と呼びかける。それぞれ勝手に喋っていたような話し声がピタリと止まる。一斉に振り向く。喋ろうとして、ぼくは口ごもる。何と言えいいのか？ この状態をどのように説明すればいいのか。考えているヒマなどない。

「おじさんを助けてくれないかなあ。悪い人につかまってしまっただけ。ほら、これを見てごらん。痛い痛い。お願いだから、皆でおじさんを逃がしておくれよ」四人がちづるちゃんを見る。彼女は肩をすくめる。先程リボンの子がしたように。それには同じような意味があるらしい。言葉にしたかどうか。皆が真似る。「オー、ノオー」とでも言いたいのか。それがすむと今度は口に手をあて、含み笑いをはじめる。一人がケツと

声を出す。また一人が同じように笑う。皆がケツと言う。いつの間にか大きな笑いになっている。ぼくの思いは通じていないようである。

「ほんとうなんだ。おじさんは何も悪いことをしていない。誰か呼んできておくれよ」声を張りあげる。

「お父さんノ」リボンの子がぼくを指差して叫ぶ。

「帰ってきた。ちーちゃんのお父さんが戻ってきた。よかったねえ」背の高い女の子がちづるちゃんをのぞき込みながら言う。

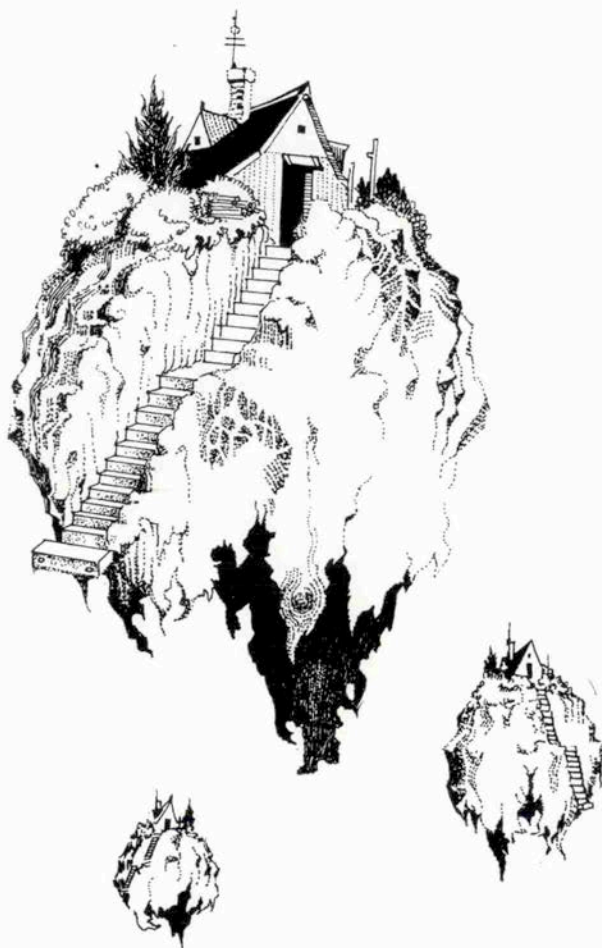
「よかったよかった」皆が声を揃える。

いつの間にか父親役の子が縛られていた。紙紐のようなもので手と脚をぐるぐる巻きにされていた。

「あなた、ごはんにしましょうか」母親役の子が言う。

父親はうなずく。

「さあ、みんな、ごはんですよ」母親は紙をちぎり、三



78 Chit Enoki

人の子供に一枚つつ配る。自分も一枚とり、最後のそれを父親に向けて差し出す。彼はそれを齒でくわえ、くちやくちやとうまそうに食べる。

「次はおまえの番だ」言いながら父親は自分で紐をほどき、リボンの子を縛りはじめた。

ぼくは肯定されている。どうしてだろう。ぼくはその子供たちを知らない。はじめて見る顔ばかりである。それなのに子供たちはぼくを知っていると言う。こんな奇妙なことがあるだろうか？

あるかもしれない。妻が迎えにこないということをどう説明するのか。この部屋を探しあてるのは無理だとしても、夫が帰ってこないことを、誘拐されたことを、警察に知らせに行くことくらいはできるだろう。通り魔や心臓病の少女にあれだけの興味を示すマスコミのことだ、争って書きたてるはずである。何故ぼくのこと在新聞に載らないのか。女の言うように、「もうそんなもの必要ありませんわ。だって、あなたはここにこうして帰ってきているじゃありませんか」なのか？ ある奇妙さを、未だに現れない妻が裏つけてしまいそうである。

ふたたび戸を叩く音。

「ごめんください」鼻にかかった女の声。妻かもしれない。いや、ぼくをここから救ってくれさえすれば誰でもいいその人を妻とするだろう。

戸は向こうから開く。四十歳前の肥った女。回覧板のようなものを戸口から差し出ししながら、

「読んだらお隣へ回しておいてください」と鼻声で喋り辛らそうに言う。

「いつもごくろうさま」女は駆け寄る。女の背中越しに、肥った女の丸い視線が見える。ぼくを見ている。眼が合うと気まり悪そうに避ける。これは怪しい思いながら、

「奥さん」とぼくは呼びかける。視線が戻ってくる。それを睨みつけながら、

「奥さん、こんなところにこんな男がいるなんて、しか

も縛られているなんて、おかしいと思いませんか？ 誘拐されたんです。監禁されているのです。助けてください。お願いです。警察を呼んでください」一気に喋る。ぼくの言葉に子供たちの騒ぎ声がやんでいる。女は回覧板を受けるとと振り返り、わずかに眉をしかめてぼくを見る。

「気苦労ですね。いつまでも。だけど、いいじゃありませんか、帰ってきてくれただけでも」鼻声は女の顔色をうかがいながら喋る。

「ええ、何かと御迷惑をおかけすると思いますが、よろしく願います」女は丁寧な頭を下げながら言う。

「いいえ、そんなこと気になさらずに。お互いですもの。しあわせになるためには助けあわなければ」

「ありがとうございます。私にとってもこれが最後のチャンスですし」

「ほんとうによく辛抱なさいましたわ。何かお手伝いすることがありましたら遠慮なく言ってください」

これ以上黙って二人の会話を聞いているとわけがわからなくなってくる。間に割って入るように、

「待ってください！ こいつは妻ではない。いや、ぼくは夫ではない。奥さん、それくらいのことばあなただって知っているでしょう。お願いしますよ。隠さずほんとうのことを言ってください。教えてください」こうなったら哀願するしか方法はない。だが、

「御主人さん、さしでがましいことを言うようですけど、あまり奥さんを困らせないで」と鼻声は眼の縁に涙をためて言う。

「奥さん、いい加減にしてくださいよ。困っているのはぼくの方なんです。それに、ぼくはあなたのことだって全然知らない。会ったこともないでしょう」

「いいえ、私はよく存じていますわ。しばらくここを留守にされるまでは、ほら、いつもそこところで挨拶していたじゃありませんか」